

初心者カウンセラーによる乳幼児観察のありかた

—— カウンセラーとしての資質を育むために ——

中津 郁子*, 二宮 麻利江**, 山下一 夫***

(キーワード：乳幼児観察, 保育園, 初心者カウンセラー)

I. 問題と目的

カウンセラーを目指す者は、クライアントの心に寄り添い共感的理解を行うため、感受性や想像力を育む必要がある。ロンドンのタピストック・クリニックでは、心理療法家の感受性トレーニングのために、乳幼児観察という訓練が行われている。これは、児童心理療法家の訓練の一つとして、ビック (Bick, E.) によって始められた。衣笠 (1994), 鈴木 (1994), 渡辺 (1994), 阿比野 (1997), 山口 (1999), 木部 (2001), 脇谷 (2007) らがこの乳幼児観察を紹介している。それらによると、誕生直後より2歳までの母子の生活を観察者が決まった時間に家庭訪問して、「関与しながらの観察」をするというものである。母子関係のやりとりを観察する中で観察者の感情も揺り動かされる。また、転移、逆転移への理解や、非言語でのコミュニケーションへの調律などを養うことにもなる。これらは、治療者の基礎的訓練として、重要なものである。さらに、山口 (1999) は観察者の五感イメージが活性化され、身体表現による交流が観察者におこると言う。渡辺 (1994) は、間主観的 (intersubjective) な交流を通して伝わってくる、乳幼児の対象関係の世界を観察すると言う。

心理療法を志す者にこのような乳幼児観察は重要と考えられるが、実際に長期間、家庭で母子の生活を観察するのは難しい。そこで、保育園に協力を依頼し、実施することを試みた。

本研究では、保育園における乳幼児観察の事例を取り上げ、乳児と保育士のやり取りを目の前に、観察者がどのように心を動かし、気持ちを収めたかに着目して考察した。また、保育園において乳幼児観察を行ううえでの有用性や課題について検討し、保育園で乳幼児観察を行うことの可能性について論考する。

II. 方法

1. 方法

Z県にあるY保育園の0歳児クラスに週1回訪問し、観察を行なった。対象者はA(7ヶ月, 女児)と、保育士のP(30歳代, 女性)であり、関わり合いの多い時間帯である午前9時30分から10時30分に実施した。本文中のBとCはPの担当児である。観察期間はX年4月から11月である。

2. 記録

観察終了後、その日に起こった出来事を可能な限り詳細にまとめた。内容としては、Aの行動や、AとPの関わりが中心であるが、印象に残った場面における観察者の心の動きにも着目し記録に加えた。

3. 振り返り

乳幼児観察で得られた記録をもとに、週に1度スーパーバイズを受けた。Aの気持ちになって出来事を振り返り、観察者の立場から感じたことなどを言葉にしてスーパーバイザーに伝え、意見のやりとりを行うことで観察の内容を深めた。また、Aの気持ちを一層理解することや、新しい視点を取り入れるため、保育の観察実習に参加している大学院生とともに、振り返りの場を設けた。

*鳴門教育大学臨床心理士養成コース

**徳島北警察署

***鳴門教育大学臨床心理士養成コース

Ⅲ. 事例（一部抜粋） { } はその時の心の動きなど

1 4月26日 (7ヵ月)

PはAのおむつを替えようと、「Aちゃん、きれいにするわな」といいベッドに寝かせる。Aは足をバタバタさせておむつ替えをしてもらう。「あー、うわあー」といいながら足をまげて、おむつ替えしやすい姿勢をとる。「1、2の3でおきしよね」と声をかけてしっかりとAの手を握って起き上がる時、観察者が視界に入ったのか、こちらをチラッと見る。観察者が動くと、Aは視線を動かしじっと見つめる。しばらくすると、Pのほうを見たり、他の子を見たりする。他の赤ちゃんが近づくと、足を少し動かす。Aは泣いている子を、チラッと見たり、寝そべっている子を見る。Pが近づくと、そちらを見る。Pが手を差し出すと、Aは手をバタバタさせ表情がゆるむ。

{保育園側からのアドバイスもあり、Pの担当児3名を意識して観察するが、1対1の関わりを意識して見ることができず、観察者はあの子も、この子も…というふうに3名全ての行動を把握し、観察しなければという気持ちが生じ、集中できなかった。}

2 5月9日 (7ヵ月)

Aはうつ伏せに寝ている。うつ伏せで寝るのは今日がはじめて。足をバタバタさせ、顔をマットにこすりつける。右に左に顔を振り、居心地が悪そう。Pが、「Aちゃんおはよう。もう起きる？」と声をかける。Aは泣きながら足をバタバタと動かし、手ではマットを叩いて、顔を左右に振る。「そやな、はじめてやもんな、頑張ったなあ、えらいなあ」。Pの表情はとても優しく、Aの気持ちを汲むように声をかける。

Aは観察者の存在に気づくと観察者の方に視線を向け、じーっとこちらを見る。Pに抱かれて部屋に戻る。抱っこされたまま、Aは上から見下ろし、保育士や他の子どもたちの様子を観察する。Pに抱かれたまま座ってしばらくやりとりをするが、Pが移動するとAの視線が少し動く。Aは一人でお座りをする。両手を畳にぱんぱんと叩きつけ、自分を落ち着かせる様に、大人がため息を上げさにつくように息をはく。

{観察者はAにじーっと見られたとき、Aから観察されているように感じた。}

5 5月30日 (8ヵ月)

PはAが泣いている理由を教えてくれる。「Aちゃん、うつぶせに寝るのが嫌なのと、おなかがすいているんです」とのこと。10時ごろPがAを起こすためにタオルケットをはずすと、両手を合わせ、足をこすり合わせて再び泣き始めるが、Pに抱っこしてもらおうと泣きやむ。PがAに声をかけると表情をゆるめ、ニターッと笑う。

Pに抱かれて部屋へ移動する。Pによると昨日あたりから人見知りがあるらしい。部屋に一人でお座りしているAは、観察者の方を見た後、泣きはじめる。短い間だが、目が合えば泣くということが続く。しばらくすると目が合っても泣かなくなる。

AはPに渡されたおもちゃを触り、口に入れて感触を楽しむように遊ぶ。部屋の真ん中に置いてある遊具にもたれかかり、体を揺らす。畳の上に手をおいて上半身を揺らし、Aより少し離れた場所にあるおもちゃをどうにかして取ろうと頑張っている様子。しかし、しばらくするとAは諦め、近くにあるペットボトルを手に取り、畳に打ちつける。他の子の遊ぶおもちゃの動きをじっと見つめ、頭をリズムよく動かす。

{前日より人見知りが始まったようだということをPより聞き、“人見知りされるかもしれない”という何ともいえない不安を抱きながら観察を行った。Aが明らかに観察者を見て泣いている様子を目の前にして、観察者は切なさを感じ、来週の観察に対する不安感までも抱いた。部屋の中にいる子ども達の中にはAの他にも観察者を見て泣く子どもがいたが、その子どもたちからは受けない気持ちをAに対して抱いていることに気づく。観察者はAに相当気持ちが向いているのだと実感する。}

7 6月13日 (8ヵ月)

Aは少し離れた場所にいるPの動きに合わせて視線を動かす。観察者は、長い時間Aと目が合う。次第にAの表情が曇り、観察者はAが泣くだろうと感じる。観察者がそう思うのと同じくして、Aは顔を赤くさせて泣く。Aがこちらを見ているのが気になり、観察者もAに視線を向け、その度にAを泣かせてしまう。Aは観察

者の視線や行動を警戒して身体を緊張させている。

PがAの傍に来ると、笑顔を見せる。Pが近くにいると、観察者と目が合っても泣かず、時には観察者に笑顔を見せる。Pが手を洗うためAの側から離れると、Pの後ろ姿を目で追いながら泣く。Pが戻ってくると、はいはいの姿勢になりPに近づこうとするが、前に進めず、後退する。踏んばって前に進もうとするたび後ろに進むので、少し離れた場所からAを励ましながら笑顔を向けているPと、畳を交互に見ながら泣く。PはAが後退していく様子を見て、前に進めるように「AちゃんAちゃん」と名前を呼び、「頑張れ頑張れ」と両手を叩いて応援していたが、部屋のスライドドアにAの足が引っかかりドアを開けて部屋の外に出て行きそうになったので、Aを抱きかかえる。「頑張ったねえ、Aちゃん」と声をかけ、抱っこしたままやり取りしているうちにAは落ち着き笑顔になる。

{AはPの行動を良く観察している。特にAの視界にPがいるときやAが不安なとき、Pを探している様に見える。今回はAが必死にはいはいで目の前にいるPの元へ向かおうとしていたが、後退するばかりで前には進めなかった。観察者はその光景を目の前にして、Aの思うようにはならない気持ちを想像して、胸が締めつけられた。}

8 6月27日 (9ヵ月)

仮寝から部屋に戻ってくると、観察者の顔を見て泣き始める。観察者はAの表情がよく見える位置に座っていたが、Aがあまりにも泣くため、Aの背中側の方へ移って観察を続ける。観察者が移動してからもAは大きな声を出して泣き、両手を口元へ持っていき、肩をこわばらせる。時には無理な体勢から振り返って観察者を見ることがあり、その度に声をあげて泣く。

Aは、プラスチック容器の穴にリングを落とすというおもちゃを提供されて遊ぶ。Aはリングを穴に入れたり出したりする。リングを掴んだまま放せない様子。遊んでいるときは泣き止むが、泣き止んだかと思うと、振り返って観察者を見て泣く。胸で深く呼吸して泣く。泣いてしばらくすると、一瞬泣き止むが、すぐに観察者の方をチラリと見て、再び泣くということがしばらく続く。

Aの手元を見ると、掴んでいたリングを離し、容器の中に落とすことが出来ている。Pとは別の保育士が、「Aちゃん出来たね、すごいすごい」と、笑顔で声をかける。Aは身体を上下にリズムよく動かす。一度成功した後はゆっくりリングを容器の中に落とすことが出来る。その後観察者はAの視界に入る位置へ移動したが、観察者の方をじっと見ても泣かなくなる。

{Aの視界に入らないようなるべく離れた位置から観察を行ったが、Aは無理な体勢になって観察者を確認しては泣いた。こちらを見ては泣くので、Aと目が合う度に観察者も眉間にしわを寄せ、複雑な表情をAに見せていたと考えられ、こうした観察者の表情がAの不安を誘っていたのかもしれない。}

11 7月25日 (10ヵ月)

Aは観察者を見ても泣かなくなる。Aは表情も観察当初より豊かになり、喃語も多くなっている。Aは観察者の近くで遊ぶ。滑り台に手を添え右手でトントンとリズムをとる。Aと同じようにリズムをとっていた観察者の手の動きをチラッと見たあと、観察者の表情をじっと観察し、しばらくして再びトントンとリズムをとり、観察者の動きを自然に模倣する。Aは行きたい場所まで、はいはいで移動する。

突然、観察者の隣にある滑り台にバンッと両手を叩きつける。その瞬間、持っていたおもちゃが小さく飛び跳ねる。観察者が跳ねたおもちゃをAの近くに置くと、おもちゃと観察者を交互に見て「あ〜」と言って、口を開ける。

PがAをご飯のお迎えにやって来ると、座ったままの状態で上半身を上下に揺らしている。AはPに抱いてもらおうと嬉しそうにし、PもAもほほえましい笑顔を互いに向けてやり取りする。抱かれたまま下を見て、誇らしげな表情を見せる。離れたところにいる観察者の方をみて、左手でバイバイをする。

ご飯を終え、Pに抱えられたまま部屋に戻ってくる。表情は穏やか。Aの次に食事をとるBが泣くと、Pに抱かれたままAはBの泣いている様子を見る。Pは泣いているBに、「Bちゃん待ってな、もうすぐやけん」と声をかける。PがAを畳の上へお座りさせようとする、Aは体を反らして抵抗し、泣き始める。Pは「Aちゃん、どしたん、そうかあ、困ったなあ…」と眩き、少しの間Aと一緒に遊ぶ。それを離れた場所から見ているBはますます泣き、AもPが自分から離れようとするのでますます泣く。PがBの食事のためにいよいよ立ち上がると、Aは体を大胆に反らし抵抗する。Pの後ろ姿を見ながら声を出して泣くが、時間がたつと一人遊

びを始め、柵につかまり立ちをして中に入っているおもちゃを引きずり降ろす。

{AはPが自分から離れていくと分かったら、体を反らして自分の気持ち表現した。また、はいはいが出来るようになり、行動範囲が広がってからは、遊びの種類も豊富になり、大分変化してきた。表情も豊かになっており、感情を表現するときの手段も豊富になっているのを見て成長の早さに感動させられる。}

#15 8月29日 (11ヵ月)

Pがエプロンを着て部屋に入ってくる様子を見ると、はいはいをして、Pに近づく。Aよりも先にCがPの元へ辿りつき、Pは膝の上にCを抱く。その途端、Aは「え～ん、え～」と声を出す。Pは「Aちゃん次やけん、待っちゃってな」と言い、立ち上がる。Pが立ち上がると、両手を口元に持っていき、頭が畳につくまで下げて泣く。PはCを抱えたまま、泣いているAに「Aちゃんこれ、しよってな」と積み木のおもちゃを提供する。Aは積み木のおもちゃに視線を移すが、Pの後ろ姿を見て再び泣き始める。

Aは泣きやみ、Pに提供された積み木を触る。積み木箱の穴に積み木を落とすという遊びをする。手に持っている積み木を、同じ形をした穴に落とすことが出来ると、近くにいる観察者の方を見て、満面の笑みをみせる。観察者が笑顔で小さく拍手をしてみせると、Aは満面の笑みで拍手をする。それからしばらくは、積み木を穴に落とすのに成功すると、観察者の方を向いて自ら拍手をするようになる。Aはそういったやりとりを続けているうちに、積み木を穴に落とした後、観察者に話しかける様に、舌を出したり入れたりしながら、「レロレロレロレ～」と言う。遊んでいた積み木を手から放し、観察者の足元に手を置き、膝にのぼる。Aは遊びを変えると、観察者におもちゃを“どうぞ”と渡すので、観察者は「ありがとう」と言って受け取る。観察者とAはしばらくこのやり取りを続ける。Aの近くにあったリングを手にとると、観察者に「あい」と渡してくれる。「Aちゃんありがとう」といってお辞儀をすると、Aもちょこっとお辞儀をする。

{観察者は自らAに積極的な関わりを持つことはしなかったが、拍手をしたことがきっかけとなりAと観察者のなかでいくつかのやりとりがみられた。このやりとりを通して、観察者は何とも言えない喜びと、関わってはダメなのではないかという思いを抱いた。}

#19 10月3日 (12ヵ月)

ベランダで遊ぶ。AとPは向かい合って座り、PがAに微笑みかけながら話をする。PがBの元へ行っている間、Aは一人でベランダをはいはいする。はいはいの途中でふと止まって顔を上げ、観察者やPの姿を目で追う。Pが何をしているかという事が気になる様で、体勢を変えて時折Pの姿を確認しているのが印象的。PはBらと関わりながら、Aのことを少し離れた場所から、気にしながら見ていたが、Aが一人で滑り台の階段を上ろうとしているのを見て、Aの側でサポートする。1段上がるごとにPの方を見るAは、“できたよ”と首を傾げ、どこか誇らしげな表情になる。一番上の階段を登り終わると、もと来た階段を後ろ向きにゆっくり降りる。飛行機がゴーっと音を出しながら空を飛んでいるのを、Pは指さし、まぶしそうに空を見上げて「Aちゃん飛行機とんどおなあ」と声をかける。Aはベランダの柵につかまり空を見上げる。飛行機に視点が定まると、“見つけた”と表現するかのよう身体をビクッと動かした後、Pの表情を見る。

{Aが滑り台の階段を一步一步登る時、登り終わるごとにPの表情を確認している様子が可愛らしく、母親と子どもとのやり取りを見ているようだった。}

#20 10月10日 (12ヵ月)

Aは廊下で遊ぶ。窓の下に手作りの階段があり、そこにAを含めた3人の子どもが窓枠につかまり立ちをして外を見ている。「パーイ、パーイ」といいながら手を振る。PがAの後ろで「Aちゃん、パーイ」とAに続けて窓の外を見ながら声を出すと、AもPに続けて「パーイ」と言う。つま先を立てて、必死に外を見ようとしている。運動場で2歳児らが遊んでいる様子を確認することが出来るが、その様子はAの視点に立って見てみると見えていないことが分かる。Aの視点からは、空と畑が見える。Pの「皆遊びようなあ」という言葉に反応したのか、Aだけは一生懸命に背伸びをして眼下を覗き込んでいる。

#21 10月17日 (12ヵ月)

ベランダで外遊びをする。外の空気はとても冷たいが、Aは楽しそうにPと遊ぶ。観察者が側で見守る様子を、Aは、はいはいの姿勢で見つめる。観察者が「Aちゃん、おはよう」とニコッと挨拶すると、Aは頭をカ

クッと下げる。AがPのすぐ側で立つ。Pは「Aちゃんおいで～」と、声をかける。Aはふらふらして、足下は不安定だが、Pに促されるまま、1歩2歩と勢いよく足を一步一步踏み出す。4歩ほど歩くと、Pに寄りかかるように倒れる。「Aちゃん、ようけ歩けたなあ、すごいすごい♪」と、Pが声高らかに満面の笑みで喜びを伝えると、Aは少し驚き、Pと同様な表情になる。

避難訓練の放送が流れる。Aは放送が流れると、ボーッと音を聞いている様子だったが、Pが「Aちゃん、こっち」と言って抱きかかえ、安全な場所まで他の子どもたち同様避難させると、いつもと違う様子を察知してか、次第に不安な面持ちになる。PがAの表情をみて、「Aちゃんビックリしたなあ」と声をかけると、「うわーん」と言って泣く。何度か放送が流れる度に目を細め、不安な表情をPに向けて涙を流して泣く。両手をPに突き出し、Pに抱いてもらう。Pに抱かれた後も放送が流れると、「ああ」と、高い声をだして、Pの胸に顔をうずめる。

部屋遊びをする。観察者と笑顔でやり取りした後、何も無かったかのように一人遊びを始める。

{Pの姿を確認できれば安心して遊べること、Pの姿が見えなくなると安心して遊べなくなることを見ていると、AにとってPが安心基地であることが分かる。他の保育士ではなくPの存在が重要なのだ。}

#22 10月24日 (13ヵ月)

部屋遊び。Pの声がすると、振り返ってそちらに視線を向けるが、誰と話しているかを確認すると、再び遊びの続きをする。部屋の中にある階段をはいはいで上ったり降りたりする。Bが熱を出しているため、熱ピタシートをはってもらおう。居心地が悪いのかBは声を出して泣く。Bが熱ピタシートを貼ってもらおう一部始終を側で見ていたAは、Bが泣くのと同時タイミングで声を出して泣く。保育士が「Aちゃんは、されてないよ。Bちゃんの気持ちが分かるんやな」と言う。Bは居心地が悪いのか、熱ピタシートをおでこから剥がし保育士の方へ持って行く。Pと保育士は、協力してBのおでこに再び熱ピタシートを貼ろうとする。それを見ていたAは、保育士の方をジロジロと見ており、Bのおでこに熱ピタシートが貼られる瞬間、“やめてあげて”といわんばかりに保育士の左腕や、頭を払うように触る。

Aが柵につかまり立ちをして、柵においてあるおもちゃを畳に落としていく。そのときに右足がボウルにはまり、ツルツルすべるのか、声を出して不愉快さをアピールし、今にも泣きそうになる。転びそうだったので、観察者はAに近寄り、ボウルから右足を取る。その後、Aはぐずり始め、左手を顔に持っていき、顔をクシャッとさせて声を出す。

{AはBが熱ピタシートを貼られる様子を見て、Bの感じている不快感を自らも体験しているように見えた。AとPの情動調律は観察中幾度も見てきたが、Aが絶好のタイミングで他の赤ちゃんと同時に泣くという今回のような場面を目の前にしたのは初めてのことであった。子ども同士の情動調律もこの時期から起こることを、見た気がした。このとき、Aが他の赤ちゃんの気持ちを想像して自らも味わっているように感じられた。他人の気持ちを察することや、味わうことを、生まれて1年ほどしか経っていない赤ちゃんが持っているのだと考えると、感動をおぼえる。}

#23 10月31日 (13ヵ月)

Aは運動場遊びを終え、部屋に戻るところ。PがAを廊下まで移動させ、「Aちゃん」と声をかけながら、はいはいをさせている。観察者が部屋に入ると、Aは入り口近くにお座りをし、右手を口元に持っていき「うう」と声を出してぐずる。涙も少し出ている様子。観察者の方をみて、「えい」と指差しをする。PがAと一緒におもちゃを介して遊ぶ。Aは先ほどのぐずる様子から一変し、穏やかな表情でやりとりを楽しんでいるようにみえる。

一人歩きが出来るようになったAより数ヶ月年上の女の子が、観察者の方へ近づき、おもちゃを手渡すなどして交流を求め。観察者が無視できず、やりとりをしていると、Aはその姿を離れたところでじ〜っと観察している。観察しながら、視線を観察者に向けて、左手で胸をさわって「あ〜う」と言う。観察者が「うんうん」と頷くと他のところに視線を移し、おもちゃにつかまり立ちをしながら移動する。Aは観察者の近くまで移動すると、ぬいぐるみを抱いたまま観察者の方を見る。ぬいぐるみをよよしすると、畳の上にぬいぐるみを置いて、次は滑り台に上ったり滑ったりする。その都度、観察者に視線を向ける。トンネルをくぐって観察者の方へ勢いよく、はいはいしてくる。観察者がトンネルを覗き込んでAの様子を窺うと、Aの気持ちが高ぶるのか、はいはいのスピードが速くなり、笑顔が見られる。

{観察者が他の子どもと関わりを持っているとき、Aがその様子を離れた場所からじーっと見つめていた。しばらくして、Aが観察者の元へ来たとき、どんな気持ちで側に来てくれたのだろうと考えて、温かい気持ちになった。}

#25 11月14日 (13ヵ月)

部屋でしばらく一人遊びが続くが、おもちゃを持ったまま入り口に向かって歩き始める。入り口までたどり着くと、持っていたおもちゃを離し、ドアに両手をついて、「ぶあ〜ん」と声を出してうつむいたまま泣く。Pはその様子を見て「Aちゃん、行きたいん。鍵がしまっとんじゃ、ごめんよ」と話しかけると、Aは泣き止む。

Pの膝に抱かれてAが絵本を読んでもらう。Aの背中とPのお腹がぴったりくっついているためか、Aは安心しきった表情。それでもAは時々、振り返って絵本を読んでいるPの顔を見るので、母親と子どものほほえましいやり取りを見ているよう。部屋にはA・B・P・観察者の4名。AがPの膝に抱かれて絵本を読んでもらっていると、一人遊びをしていたBが、はいはいをして絵本の前に座ったため、PはAを膝から降ろし、並んで絵本の読みきかせをする。

PはAに「Aちゃんすきすきすきすきすきすき♪」と声の調子にリズムをつけて笑顔で顔を近づける。AはPのおでこに自分のおでこをピタッとくっつけて、はじけるような笑顔をみせる。

木で作られた人形が階段をカタカタ落ちていくおもちゃで遊ぶ。Pに習い、AとBは交互に遊ぶ。Aが両手をばんばん叩いてBにおもちゃを催促する。Bは「いや〜」と言う。Aがおもちゃを手にしたときBがおもちゃを催促する。Aは自分の番なのに、Bにおもちゃを取られそうになったので、両手でおもちゃをしっかりと持ち、Bからはおもちゃが見えないようにしてその場を離れる。Pはその様子を見て、「Aちゃん、これも出来るようになったんですよ」と観察者に教えてくれる。

{AとPとのやりとりが、母親と子どもとのやり取りを見ているように感じる時がある。Pのやさしく包みこむようなオーラが母親の雰囲気似ているからかもしれない。AがPに包まれるように抱っこされている姿と、Aの安心しきった様子を見ると、保育園という場においては、PがAにとっての安心基地であることを実感する。}

#26 11月21日 (14ヵ月)

初めて外遊びに参加する。Aは外遊びのため、ちょうど靴を履いて歩き出そうとしているところ。3歳児らが元気良く遊んでいる中、Aは一人でしっかり地に足をつけて歩く。歩いている途中、周囲で遊んでいる子ども達を見渡していたAの表情が曇り、泣きはじめる。

地面に座っている保育士に両手をついてつかまり立ちをして寄り添う。キョロキョロ周囲を見るが、ガヤガヤしているのが怖いのか、保育士が立ち上がろうとしたり、少し動いたりするだけで泣く。Pが部屋からBを連れて外に出てくる。AはPの姿を発見し、Pを確認した瞬間から声を上げて泣き、焦ってPの方へと歩く。Aの視線の先にはしっかりPがいる。Pの側まで歩いていくと、PはAが泣きながら自分の方へ向かって歩いてきたことを笑顔で受けとめ、「Aちゃん」と笑顔で声をかける。AはPに抱擁を求めるが、PはBに靴を履かせているので、言葉と表情でAの相手をする。Aはやりきれないのか、何ともいえない面持ちで泣く。

{外遊びの時、周囲の様子に敏感に反応して泣いていたAが、Pの姿を確認すると更に大きな声を出して泣き、Pの方へ焦って向かうという場面に出会った。Aが安心できる場所を求めていたのと同時に、Aが如何に不安な気持ちを抱いていたかが伝わってきた。また、この不安な気持ちはPに抱かれることで解消することだと容易に想像できた。外遊びや部屋の中での遊びを通して、Aがつかまり立ちすることなく自分の力で立って歩くのを見るのが出来た。Aが立って歩いているときの視線と、観察者が座って観察をする時の視線の高さが似ているからか、Aが何を目的に歩いているのかが分かりやすくなった。同じ視点で物を見ることは、Aが何を想像しているのか、観察者としてイメージを膨らませやすい。}

IV. 事例の考察

1. Aの成長

観察当初は、Aに対して「Pに手伝ってもらわないと一人では何もできない赤ちゃん」という印象を持っていたが、観察を重ねるごとに、成長した姿を見ることになった。一人でお座りできるようになり、歩くようになる

までの身体面での成長は目を見張るものがあった。腹ばいで移動するようになり、Pに近づきたい一心で、はいはいしようとするが、頑張れば頑張るほどPに近づけず後退した(#7)姿を見て、Aが目的に向かい、前に進もうという気持ちを持っていることや、頑張る力を育てていることに気付いた。

#21で、Aが大きな笑顔を見せながら、ふらふらと4歩踏み出し、Pに倒れかかるようにして歩いてみせた時は、Aと共に幸せな気持ちを味わった。

また、身体面の成長だけでなく、Aの心理面での成長も実感した。#1から、観察者が部屋に入ると、ちらっと視線を移し、じっと注視する姿が見られた。観察者はAと目が合うと何故か不安になることがあり、それが、#5からは人見知りをするという形で現れた。人見知りはAにとって成長した証ではあるが、同じ空間に観察者がいるということは脅威であったと思う。しかし、Aは#11で泣かなくなるまでの、6週間という時間の経過とともに人見知りを克服していく。その立ち直りの過程を見ると、例えば、観察者が同じ空間にいて怖いときや、他の耐え難い状況に遭遇したときは、Pに関わりを求め、遊びに興味をそらすなど、その状況に耐える策を講じていた。Pに関わりを求めることや、遊びに集中することは、Aがその場をやり過ごす為に必要な手段であった。試行錯誤しながらそういった手段を増やしていたことが、観察当初と異なる変化であり、Aの成長を物語っていた。そして、少しずつ観察者を受け入れていく姿をみて、Aが心理面においても成長を遂げていることを実感した。

2. AとPの関係

観察を通して、AとPの様々な関わりを見る事が出来た。観察当初、Aは観察者に対する人見知りから立ち直るため、Pに1対1の関わりを要求した。Pが抱っこしてあやすと、Aは少しずつ落ち着きを取り戻し、緊張した状態が解けてほっとした表情に変わった。時には、Pと笑顔を交わし、姿を確認するだけで、観察者の存在を気にすることなく、他に興味をそらすことが出来た。しかし、AがPを必要とする場面において、Pが不在であったり、対応できなかつたりで、嫉妬や不安という満たされない感情を味わうこともあった。例として、Pと他児の関わりを見て生じる嫉妬心や(#15)、自分の思うようにならないときに味わう切なさである(#26)。また、Aの思いとは裏腹にPが自分の側から離れてしまうときは、Pを自分の元へと引き寄せるため、両手を口元にもっていき、頭を畳につけて泣く、という大胆な身体表現でアピールすることもあった(#15)。このように身体全体をつかってPを求めても、関わらず、Aは満たされない体験をすることがあった。

このような状況でPは、Aの気持ちを汲み、受け入れたいという表情を見せたが、他にも担当児を抱えているため、どうしてもAを受け入れることが出来ないときがあった。そのため、Aは耐えるしかない状況を体験していた。Aはどうしても心が満たされないとき、他に興味を移すなどして我慢をするしかなかったと考えられる。観察者はそのような状況を目の当たりにし、Aと同様切ない気持ちを抱いた。こういった体験を目にしていたため、Pと1対1で関わる事が出来たときの、Aの満足げな表情を見ると、観察者は安堵した。

観察者は、AとPの様々な関わりの中で、2人と一緒に心が揺れる体験をした。印象に残っているのは、ベランダ遊びをしているAが、Pと一緒にベランダの柵につかまり、空を見上げて飛行機を見つける場面である(#19)。ゴーツと音のする空を、まぶしそうな表情で見上げたPは、「Aちゃん、飛行機」と、Aの表情を確認しながら話しかける。するとAは、Pの視線の先をじっと見つめ、しばらくして飛行機に視点が定まると、身体をびくっとさせ、何かに気付いたような表情でPを見返し、顔を見合わせて笑顔になった。AとPが、それぞれの心で味わっていた感動を合致させた瞬間だった。この時、観察者は2人が笑顔でやりとりしている様子を、少し離れたところから一緒に味わって見ていた。Aと同じ様にしゃがみこみ、まぶしい空を見上げて見つけた飛行機は、その瞬間観察者にとって、かけがえのない物になった。

Aは自分の気持ちを満たすためにPを求め、必要としており、AにとってPは、保育の場における安心基地だということが実感できた。

3. Aと観察者の関係

#1で、Aは観察者が視界に入ると、こちらをちらっと見てから注視した。Aは観察者を意識して遊んでおり、好意的な態度を示しているかに見えた。しかし、#5から、観察者を見据えて泣くようになった。観察者はAが声をあげて泣いている様子を、ただじっと息を潜めるようにして見ていることしか出来なかった。そして、観察者の視線や行動がAの“泣き”に影響しないように気を使った。しかし、振り返って考えてみると、観察者はAが泣けば泣くほど、Aと同じように表情を歪め、申し訳なさそうな視線を向けていた。この時、

観察者がAに情動調律していたことが、さらにAの“泣き”を助長させていたかもしれない。しかし、#11頃には観察者を記憶のなかに留めておくことが出来たのか、泣くことはなくなった。

#15で、Aがこれまで出来なかった積み木落としを成功させる。観察者はAが喜んでいるのを見て嬉しくなり、小さく拍手をする。この拍手がきっかけとなり、Aが手に持って遊んでいるおもちゃを介して、観察者とやりとりを行なった。この時、観察者は観察という枠を超えてAの行為を受け入れている事実、「これでよいのだろうか」という気持ちを抱いた。

しかし、Aの笑顔を見ているうちに、不安は薄れていった。Aは観察者を見ると小さくお辞儀をし、おもちゃを差し出した。観察者が両手で受け取ると、Aの表情は一変に柔らかくなり、笑顔になった。それまでAと、関わりたい気持ちを抑えていただけに、観察者だけに向けられたAの笑顔を見て、とても幸せな気持ちになった。また、これまでは少し離れた場所から、Aの気持ちを想像していたが、この時は、Aがどういう気持ちであるか、目の前にいるAの表情を確かめながら考えることが出来た。Aは、このやり取りを通して、楽しさを共有できる相手として観察者に心を開き、観察者はそのことに喜びを感じた。

#23において、Aは、一人歩き出来るようになった女の子が、観察者と交流している様子を離れた場所から、じーっともの悲しそうに見ていた。Aは観察者と目が合うと、左手で自分の胸を触りながら「あーっ」と言う。偶然的な行為だったかもしれないが、Aが嫉妬に似た、何ともいえない感情に支配されているようで、いたたまれなくなった。Aに頷いて合図すると、Aは観察者の元までやってきて、観察者の近くで遊び、笑顔や視線で交流を求めた。こうして何度もやり取りをすることで、Aは観察者と関わりたいという感情を満たしているようだった。

この頃のAにとって観察者は、やりとりを楽しむことの出来る相手に変化しており、他の子どもと観察者が交流している姿を見て、「わたしも」という気持ちを抱いているように、もはや不安な感情はなくなり、むしろ関わりたいという気持ちを育てていた。

Aと観察者は、観察者と観察対象者という枠を超え、目に見える部分での関わりを育んだ。この関わりは本来の乳幼児観察において、積極的に行なわれないが、観察を通して、Aを無視できず、時として関わりを持つことを選択した。結果的に、このことが、目に見えない部分での絆を育んだと考えられる。

4. Aと他児の関係

Aと他児との関係は、成長に伴い変化した。

#25で、Aは取られそうになったおもちゃを他児には見えないように大事に抱えて持ち、その場をはいはいで立ち去るという場面があった。観察当初は遊んでいるおもちゃを取られても何も出来なかったが、身体の成長に伴い、徐々に自分が持って遊んでいる物を取られたくない、「いやだ」という気持ちを行動に表わすことが出来るようになった(#25)。

この「いやだ」という気持ちは、他児との関わりを通して育まれた。Aは、他児とPが関わる様子を見て急に寂しくなったり、嫉妬を覚えて、Pの元へ向ったりした。

集団保育の場では他児と関わるのが当たり前であるため、我慢しなければならないことも増え、満たされない気持ちを抱えることもある。この満たされない気持ちを解消するために、保育士に視線を移して、自分のおかれている状況を把握してもらおうとしたり、一人遊びなどで他に興味を移したりして、努力をしているのではないだろうか。

#5でAは他児が遊ぶおもちゃの動きをじっと見つめながら、リズムよく上半身を動かす行動をみせた。他児が遊んでいるのを羨ましく思い、そのおもちゃを横取りするでもなく、離れた場所から身体でリズムをとりながら気持ちを表現しているAはどこか大人びてみえた。このときのAは、他児にA自身の気持ちを重ねて、少し離れた場所から楽しさを味わっていた場面だったのではないかと考えられる。

Aが他児に対して自分自身の気持ちを重ねているのを目の当たりにしたのが、風邪を引いて熱がでていたBに、Pと他の保育士が協力して熱ピタシートを貼る場面である(#22)。Bは熱ピタシートを貼られるのが嫌で、熱ピタシートを見ながら首を左右に振り身体を震わせて必死に貼られるのを抵抗していた。その一部始終を観察していたAは、Bの泣き顔と熱ピタシートを何度も繰り返し見て、PがBのおでこに熱ピタシートを貼ろうとしたまさにその瞬間、AもBと一緒に大きな声をあげて泣き始めた。このとき、AはBが感じているのと同じ不快感を味わい、泣いたのではないだろうか。自分と同じ背格好のBの表情や、その状況をじっくり観察しているうちに、AはBの気持ちに自分の気持ちを重ね合わせていたと考えられる。

5. 観察者と指導教員との関係

観察が始まった頃は、観察内容の事実に焦点を当てることが多く、AがPとの関わりの中でどのような気持ちを抱いているのか、観察者自身がそれを受けて何を感じているのかをじっくり味わうという余裕が持てなかった。しかし、スーパーバイズを重ね、自らの気持ちと向き合ううちに、Aの気持ちになって感じるようになっていくようになり、じっくりそれを味わうことの大切さに気づけるようになった。

スーパービジョンでは、指導教員と一緒に記録を通して観察場面で起きた一連の出来事を振り返った。この時、観察者の考えが及ばなかった意見や指摘をいただき、自らの堅くなっていた思考に気づき反省したり、観察場面で生じたAとの関わりにおいては、「あれでよかったのだ」と勇気づけられたりした。

振り返って考えると、AがPに対して基本的信頼を確固たるものにしたように、観察者もまた、指導教員に対して信頼感を築いていた。

また、保育実習に参加していた大学院生たちとの振り返りの場では、それぞれの異なる視点からの意見や思いを聞くことが出来た。そのことによって、観察内容を考察する視点が広がり、考察内容も深まった。

乳幼児観察を行う者は、出来るだけ定期的にスーパーバイズ等を受け、観察内容を詳しく振り返る時間を設けるべきであろう。そうすることで、観察内容により多くの気づきや可能性を見出せるのではないだろうか。

V. 総括

1. 保育園で乳幼児観察を行うこと

保育園で乳幼児観察を行う際に考えなければならないことがある。まず、対象児をどう抽出するかという問題である。観察者はあらかじめ本研究の趣旨を園長と乳児クラスの保育士に伝え理解を得た上で、「特定の園児と保育士の関わりを観察したい」という最低条件を要望として伝え、保育園側に対象者を抽出してもらう方法をとった。観察を保育園で行うとなれば、保育園側との協力や連携が前提条件になる。

いざ、保育園で乳幼児観察を行うと、観察者ではいられない状況に出会う。それは乳児同士のおもちゃの取り合いなどによる危機介入、乳児の転倒を未然に防ぐための危機回避、また時として保育士の役割を担う場合である。Y保育園の乳児クラスでは一人の保育士がおよそ3人の乳児を担当しており、食事などの場面に入ると、必要に応じて他の保育士が部屋にフォローとして入る。しかし、部屋にいる保育士は、乳児と1対1の関わりをしていることもあり、観察者は部屋にいる乳児たちの危機介入や危機回避のため、他の乳児の行動も意識しながら観察をする必要があった。

観察者はこうした理由で乳児と関わる時、「観察者はあくまで中立でなければならない」という本来の乳幼児観察の方法を侵すことになった。中立の立場を自ら崩すことに抵抗はあったが、「自分がやらなければ」という思いを抱きつつ、関わることを選択した。このことに関して、スーパービジョンで指導を受け考えた結果、乳児の安全の為に観察者が手を貸すことは当たり前であり、こういった場面で観察者が乳児と関わることは必要だということである。

また、乳児側の視点にたつて考えたとき、危機的な状況で、まわりに大人がいるのに、誰も助けに来てくれないというのは、辛く悲しいことであり、人間不信につながるであろう。Erikson, E.H. (1959)の「基本的信頼感」が築けるかどうかにとって大切な出来事である。このような状況で手を貸してくれる大人がいることは、乳児がその場で安心して過ごす為に必要だろう。

よって、現在は時として観察者でなくなるのが、保育園で乳幼児観察を行う者に与えられた新たな役割だと考えている。

家庭訪問式の乳幼児観察では、主に乳児と母親の関わりを中心に観察するが、保育園では、乳児は特定の保育士以外にも様々な人物と関わりをもつ。よって、Aが様々な人物と交流する姿を観察することになった。Aが他の乳児と交流している場面や、他の保育士にオムツを替えてもらっている場面がそうである。Pと関わりつつも、他の人物と関わっている様子を見て、当初は、「Pと関わっている姿をもう少し観察したい」と思うことがあったが、Aの対人関係を観察することでAにとってのPの存在の大きさを改めて知ることになった。これは、Aが関わる対人関係の全体を観察していなければわかり得なかったことである。またAの対人関係を目を向けることにより、Aが他児に対して心の揺れを感じている状況に観察者自身の思いを重ね、より深くAの気持ちに添うことができたと考えている。

さらに、Pに相手をしてもらいたいのに、してもらえなくて泣いているAの状況を見たとき、観察者はAの

側に行きたいという気持ちを抑え、心の中とは裏腹にそっとその場で観察を続けた。泣き続ける A を少し離れた場所に座って見ているだけの状況は、無力な者を無視しているようでとても辛く、A が時折観察者に向ける視線は心に突き刺さるようだった。

それでも、観察者は気持ちを抑えてこの状況を見守るだけに留めた。乳幼児観察では、乳幼児の心地よい世界への退行だけではない。不安な辛い気持ちに出会う。渡辺（1994）は「不確実で不安定な瞬間を意味がわからぬまま抱えることも一つの訓練である」と言う。そして、「相手の深い情緒とつきあうことは、原始的で乳幼児的でネガティブな情緒を、耐えつつ受けとめることであり、これがピオンの containment の機能の一部である」と言う。感情の嵐に耐えながら、その意味を考え、抱えていくという過程を体験していた。

この体験は、A が集団保育の場に身をおいているということ、P が A だけでなく他児とも関わること、保育の場では当たり前な状況であるが、対象者の様々な対人関係のやり取りを観察するからこそ、より多く味わう感情である。よって、保育園で乳幼児観察を行う場合、乳児と特定の保育士の関わりだけでなく、乳児を取り巻く環境や対人関係全てを観察することが望ましいといえる。

2. 乳幼児観察によって育まれたもの

A と P の関わりを通して、そのほほえましいやりとりから同じ空間に依存できる相手がいることの喜びや、誰も一人では生きていけないという人間の本质に触れた。反対に、我慢しなければならない場面で、A が身体全体で悲しみを表現し泣く姿を目の前にすると、A のやりきれなさや悲しみの深さを感じて何とも言えない切ない気持ちを味わった。

観察者は観察を重ねるうち、座ったまま A の行動を見るのではなく A と同じ目線から物事を見てみたいという気持ちを抱くようになった（#20）。そうして見えてきたのは、それまでの視点からは分からなかった新しい風景と状況だった。A と同じ目線になって状況を眺めることで、はじめて分かる事実は何よりの感動であり、同じ目線で物事を見ることの大切さを改めて知ることになった。A と同じ目線で物事を見たいと思えたことや、そういった視点に立つことの大事さを感じたことは観察を通して育まれたと考えている。

また、観察を重ねるごとに、「A の気持ちを知りたい」、「A の行動はこういう感情を受けたからではないか」など、観察者の個人的な見解だけでなく A の気持ちになって物事を感じ、考えたりしながら観察する時間が増えた。同時に、観察者自身の感情を A に重ねて見ることも増え、その時何が起きたかという出来事よりも、そのとき何を感じていたかという気持ちの部分に焦点を当てる時間が増えていったように思う。これは、内面に意識が注がれるようになったからではないだろうか。観察者は観察を通して、A を理解するという視点にたつて他者理解を試みる一方、自己理解を進める機会を得ていた。

乳児を目の前にすると、様々な感覚が敏感になっていることに気づく。それは、乳児が五感を敏感に使っていることが影響しているかもしれない。まだ発達的には成熟していない感覚も、使える範囲で充分に使っているように見えた。観察の場においては、A が P を探している時や、P が A の側から離れる時などによく見られた。P に抱っこされているときや、聞き耳を立てているとき、周囲には目もくれずじっと P を見つめる姿がそうである。

乳児は全身で自分の気持ちを表現する。これは A を見ていて感じたことであるが、幸せや楽しさを感じているとき、A は全身でそれを表現し、表情や視線の動きを変化させた。反対に、悲しいことや辛いことがあったときも同様であり、こうした A の行動や表情の変化は、A の抱えている気持ちがそのまま表に出ているようだった。こういうとき、気持ちを偽らずに表現している A に対して、P は必ず何らかの返答をした。それは視線のやり取り、言葉をかけたり、抱っこしたり、とシンプルなものだった。A が自分のありのままを表現することが出来たのは、こうして周囲に A の発したことを受け止めてくれる P がいたからだろう。飾らずに自分を表現することの出来る A が眩しくみえ、素直に自分を表現することの大切さを A に教えてもらった。

観察の中で、A と P の関わりによる観察者自身も一緒に体験しているかのような感覚を味わうことがあった。しかし、当たり前のことだが 2 人のやり取りを観察していると、そこに観察者が加わっていないという事実気づく。ここで改めて何とも言えない虚しさを感じたが、徐々にそういった思いに耐えなければならないと覚悟が出来てきた。しかし、他の実習生が A と関わっている様子を見ると、どうしても「羨ましい」という気持ちが生じ、この気持ちをどう整理すればよいか分からずモヤモヤしたまま観察を続けることがあった。しかし、こういう気持ちを抱いたときは、A が観察者に何らかの関わりを持とうとし、2 人の間でおもちゃを介してのやり取りが見られた。これは偶然の一致であるが、A が観察者を気にかけていることがとても嬉しく感じら

れ、どこかで A と気持ちがつながっているのかもしれないと思うことがあった。

観察を通して、A に対し「積極的に関わらない」という原則は守りつつも、A から観察者に向けられる行為を受け入れたときは、罪悪感に似た思いも抱いていた。しかし、現在は無視しないでよいと思えるようになった。原則を意識しすぎるあまり、本当に大切なことを見逃してしまうように思うからだ。A の行為を受け入れてやりとりした時に観察者が味わったのは、通じ合うことのできた喜びだった。

この観察を通して、観察者は観察者と対象者が互いに影響し合いその場に存在しているということをもっと体験し、普段は表に出さないような感覚や感情を意識することになった。

VI. おわりに

本論文は、二宮（2007）の修士論文を、山下・中津が指導し、まとめ直したものである。

初心者カウンセラーとして、保育園での乳幼児観察を試みた。観察者が対象児 A の成長に寄り添いつつ、逆転移による観察者自身の心も見つめ自己理解を深めていく様子が記載されている。最初は泣かれる対象であった観察者が A の成長と共に A の世界の共感的理解を深め、そして、A と P と観察者も含めた間主観性が深まっていく。また、観察者は意識せずに情動調律をおこなっており、そんな自分にも気付いていく。

8ヶ月間の乳幼児観察ではあるが、観察者の乳児の心を読み取る力や感じる能力が増し、五感も活性化されていったようだった。このような保育所での乳幼児観察は初心者カウンセラーの資質を育むために役立つと言えるだろう。

謝 辞

この研究を快諾していただいた Y 保育園の園長先生や皆様、対象児の A ちゃんとその御家族の皆様、保育士の P 様に心から感謝いたします。

引用文献・参考文献

- 阿比野宏 1997 タビストック方式の乳児観察を通じて（その1）—日本での経験から— 精神分析研究, 41 (5), 475-481.
- 阿比野宏 1998 タビストック方式の乳幼児観察を通じて（その2）—エディプスの観点から— 精神分析研究, 42 (2), 189-194.
- Bowlby, J. 1979 *The Making & Breaking of Affectional Bonds*. Tavistock Publications
(作田勉 (監訳) 1981 ボウルビイ母子関係入門 星和書店)
- Covington, C. 1991 Infant observation re-viewed. *Journal of analytical Psychology*, 36, 63-76.
- Daws, D. 1985 *Your One Year Old*. Child Psychotherapist of The Tavistock clinic
(繁田進・新倉涼子 (訳) 1985 子どもの発達と心理◆1歳 あすなろ書房)
- Erikson, E.H. 1959 *Identity and the Life Cycle*. Int.Univ.Press. (小此木啓吾 (訳) 1973 『自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル』 誠信書房)
- 木部則雄 2001 乳幼児観察—幼児が語ること— 白百合女子大学 発達臨床センター紀要, 5, 28-35.
- 衣笠隆幸 1994 タビストック・クリニックにおける乳幼児観察の方法と経験 乳幼児精神医学の方法論 岩崎学術出版社, 27-39.
- Margaret, R. 1988 Encountering Primitive anxieties some aspects of infant observation as a Preparation for clinical work with children and families. *Journal of Child Psychology*, 14, 15-28.
- 二宮麻利江 2007 初心者カウンセラーによる乳幼児観察のありかた—カウンセラーとしての資質を育むために— 鳴門教育大学大学院修士論文
- Rosenbluth, D. 1983 *Your Baby*. Child Psychotherapist of The Tavistock clinic
(繁田進・新倉涼子 (訳) 1983 タビストック子どもの発達と心理◆0歳 あすなろ書房)
- 鈴木 龍 1994 乳幼児観察で見えるものは何か? 乳幼児精神医学の方法論 岩崎学術出版社, 40-51.
- 脇谷順子 2007 タビストックセンターにおける子どもと思春期, 青年期の精神分析的な心理療法のトレーニング

- について ― 情緒的な経験を通して学ぶこと ― お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要, 9, 54-62.
渡辺久子 1994 乳幼児観察 乳幼児精神医学の方法論 岩崎学術出版社, 53-66.
山口義枝 1999 乳幼児観察の経験 身体交流の面から 心理臨床学研究, 17 (1), 34-42.
山下一夫 1999 生徒指導の知と心 日本評論社

付記 本研究は,平成19年度の独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金の交付を受けて行ったものである。

Ways of Observation of Infants and Small Children Recommended for Inexperienced Counselors : To Foster Capabilities and Skills as Counselors

NAKATSU Ikuko*, NINOMIYA Marie** and YAMASHITA Kazuo***

(Key words : observation of infants and small children, nursery school, inexperienced counselor)

Abstract

Referring to the ways of observation of infants and small children adopted at Tavistock Clinic within the framework of training for pediatric clinical psychologists, we practiced observation of infants and small children at nursery school. This is a case study of observation of infants and small children at nursery school aimed at fostering capabilities and skills of inexperienced counselors. The usefulness of this approach as well as the open issues and possibilities related to it as a means of observing infants and small children at nursery school are also discussed.

The study lasted for a period of 8 months. Observation of infants and small children was done once a week (for one hour each time) and the findings from observation were reviewed. The study period corresponded to the period during which Child A (7-month-old infant) began to walk. Records were taken, focusing on the relationship between Child A and Nursery Governess P and including changes in the mind of the observer.

While following the growth of Child A during the study period, the observer kept watching her own mind by means of reverse transition and deepened her self-understanding. The observer increased in the ability to read and perceive the infant's mind, accompanied by activation of her five senses. This experience was useful for the inexperienced counselor to stimulate capability and skill development. However, when observing infants and small children at nursery school, the observer was sometimes forced to leave the principle of "avoiding active involvement."

*Training and Practice in Clinical Psychology, Naruto University of Education

**Tokushima Kita Police Station

***Training and Practice in Clinical Psychology, Naruto University of Education